

高知港（浦戸）の「みなと文化」

広谷 喜十郎

目 次

第1章 高知（浦戸）港の整備と利用の沿革	97-1
1. 古代の海運	97-1
2. 南海航路の寄港地	97-2
3. 長宗我部時代の海運	97-2
4. 江戸時代の海運	97-3
5. 浦戸港から近代の高知港へ	97-4
第2章 「みなと文化」の要素別概要	97-6
1. 海運安全のための祈願寺社	97-6
(1) 土佐神社のつぶて石と船遊び行事	97-6
(2) 掛川神社の海の神さま	97-6
(3) 仁井田神社の夕顔丸の絵馬	97-6
(4) 浦戸の山祇神社と日和山	97-7
2. 浦戸港に来た人びと	97-7
(1) 夢窓疎石と吸江十景	97-7
(2) イギリス人・アーネストサトーの来航	97-8
(3) 西郷隆盛・大久保利通・木戸孝允の来航	97-8
3. 土佐の民謡・よさこい節	97-9
第3章 「みなと文化」の保存と振興に関する地域の動き	97-10
1. 浦戸湾関係古絵図の保存	97-10
(1) 吸江図絵	97-10
(2) 高知下町浦戸湾風俗絵巻	97-10
(3) 種崎浦の古絵図など	97-11
2. 「みなと文化」の振興の動き	97-11
(1) 浦戸大橋と桂浜公園	97-11
(2) 種崎の千松公園と海水浴場	97-12
(3) 五台山公園と展望センター	97-13
(4) 青柳橋と丸山親水公園	97-13
(5) 開成館跡の公園整備の動き	97-14
3. むすび	97-15

所在地：高知県高知市

港の種類：港湾

港格：重要港湾



【位置図】



【現況写真】

(国土交通省四国地方整備局高知港湾・空港整備事務所)

第1章 高知（浦戸）港の整備と利用の沿革

1. 古代の海運

高知県は、背後に高い山脈が連なる四国山地があり、前面に太平洋が大きく広がっている。昭和10年に四国山地を越える土讃線が完通するまでは、まさに陸の孤島であった。そこで土佐の中央部に位置する高知港（浦戸港）は歴史的に古代の国府や江戸時代の高知城下へとつながる海の玄関口として大きな役割を果たしていた。

大昔の浦戸湾内には、湾内十島とか、七島といわれる島々が浮かんでいたもので、現在の高知市の市街地のほとんどは海底だったと言える。七島とは、大島（五台山）、葛島、田辺島、比島、洞ヶ島、竹島、玉島である。現在は玉島だけが湾内に浮かんでいる。そして、国府へ通じる河口に大津の舟戸、中央部に中津、西部に小津という舟の出入りを示す港の面影を伝える地名も残っている。

『土佐日記』は、歌人紀貫之が四年間の土佐での国司任務を終了し、承平4年（934）12月21日に出発して、海路をたどりながら翌年2月16日に京都に帰着するまでの55日にわたる船旅日記を女性の日記としてまとめたものである。

12月27日の条には、「大津より浦戸をさして漕ぎ出づ」と、大津の舟戸辺りから船出している。現大津小学校内にそれを示す記念碑が建立されている。この大津からすぐ近くに、鹿児崎がある。鹿児（かこ）とは、船の乗組員である水主（かこ）のことであり、鹿児辺りは数多くの船乗り人がいた地域であった。ここで、たらふく酒を飲んだ船頭たちにせがまれて、貫之が乗船し、浦戸への航路を急いだと『土佐日記』では伝えている。

なお、この地を見下ろす高台に、海の守護神を祀る鹿児神社がある。

紀貫之の船が寄港した湾口にある浦戸の船泊まり辺りには、海の玄関口にふさわしい海の史跡や伝承が数多く残されている。

奈良時代の中央政府が編集した『風土記』によると、海洋伝説の女王的存在であった神功皇后が土佐に来国された折、湾内の小島の磯辺で休息し、海中で光明を放ち輝いている

白い石を見つけた。皇后は「これは海神の賜り物の白真珠なり」と、大いに喜んで拾い上げた。これによりこの島を玉島と名付けられたという。玉島には玉島神社があり、海の三女神と神功皇后が祭神として祀られている。

大昔、湾口近くに住んでいた海の長者たる宇賀長者がたくさんの年貢米を取り立て、そのとき捨てた米ぬかが小山になったという場所に、宇賀神社が鎮座している。『土佐日記』では対岸の池の豪族が、紀貫之の船に数多くの届け物をしたとの記述もある。

これらの事実をみていくと、この辺りには古代の海洋民が集住していて、そのシンボリックな海の伝承として、これらが語り継がれている。



【浦戸湾と玉島】

平安時代の『延喜式』によると、カツオやアユなどの水産物が中央政府へかなり貢納されている。この地区に住む漁民がこれらの漁業に多く従事していたと考えられる。

2. 南海航路の寄港地

室町時代になると、対明の勘合貿易が行われた。関西方面にいた細川氏と堺商人の貿易船は、瀬戸内海方面が大内氏と九州の博多商人に制圧されたため、土佐沖を航海する南海航路を設定して土佐の浦戸、薩摩の坊津などを寄港地として利用していた。

この頃、まとめられた日本最古の海事法規である『廻船大法』（「廻船式目」）に、土佐国浦戸の篠原孫左衛門と摂津兵庫の辻村新兵衛、薩摩坊津の飯田備前の三人が、日本の航海民の代表として末尾に署名している。これにより、浦戸港がわが国における南海航路の寄港地として大きな役割を果たしていたことが理解できる。この地方の繁栄を裏付けるように、埋蔵年代が室町時代前半期と推定される常滑製の大瓶が、昭和 36 年に高知市東久万西山から出土した。中味は、渡来銭である中国銭 55 種類、枚数は約 7 万枚、重量にして 70 貫が発見された。この埋蔵銭の出土地は浦戸湾内最北部「中津」近くにあるので、持ち主は海の豪族であったろうと推測される。

なお、この時期には高知県下の海岸部では愛知県常滑製の焼物がよく出土している。それらは海の道を通じて土佐へもたらされたと考えられる。

それと同じように、篠原孫左衛門も船団を引き連れて活躍した人物であったと理解できる。浦戸、長浜地区は「土佐の鎌倉」と呼ばれ、雪蹊寺には、鎌倉時代の力強さに満ちあふれた日本を代表する湛慶作などの十六体の仏像（重要文化財）も収蔵されている。

3. 長宗我部時代の海運

戦国時代末期に四国の覇者となった長宗我部元親が浦戸の地に居城を構えたのは、海上交通の重要性を認識したからであろう。浦戸湾の入り口は台風の影響などにより、湾口がふさがり、船の出入りに支障を来すこともあり、それを円滑にするために対岸の種崎地区に「元親波止」といわれる防波堤を築造している。この地区には造船所を設け、乗組員の確保をするなど海運組織づくりをおこなっている。

天正 19 年（1591）には、元親が浦戸湾内で捕獲した九尋（一尋＝6 尺、約 16m）もある児鯨を生きたままの状態で、水軍を動員して豊臣秀吉に贈り、大坂の人びとを大いに驚かせた。と、『土佐物語』で伝えている。

慶長元年（1596）8 月 26 日に、スペイン船サンフェリペ号（約 1,000 トン）がルソン（フィリッピン）よりメキシコに向かう途中、暴風雨に遭い浦戸湾に漂着した。元親は水軍を総動員して保護し、秀吉に報告している。豊臣秀吉はすぐに増田長盛を浦戸に派遣し、スペイン船を海賊船と判断して船貨を没収すると共に、船員を強制送還してしまった。これがきっかけとなり、秀吉のキリスト教禁止令布告や同年 12 月 19 日の長崎二十六聖人の処刑につながったといわれる。この港が国際的な事件の舞台となったわけである。

4. 江戸時代の海運

慶長 6 年（1601）に土佐に入国した新領主山内一豊は、すぐに浦戸城を放棄し、浦戸湾の北部にある二つの河川にはさまれた三角洲の地に城下町を設け、大高坂山に新城を築造した。そして、新城を高智山（高知のはじまり）と名付けている。儒者谷真潮が「我土佐国軍役の第一は船なるもの」（『流沢遺事』）と端的に表現しているように、海が主要街道で、船舶は最良の交通手段であった。水主は軍役体制の基礎をなしていた。浦戸湾の種崎浦に藩の造船所をつくったり、水主や船大工などを集住させ、土佐藩の海軍の重要な根拠地を設けた。

寛永年代（1624～43）になると、大坂市場への林産物の移出機構や領主的廻米機構が整備されるにともない、城下町に材木町が成立したり、城下町に集中される海産物の専売特権を納屋堀の間屋に与えている。これらの町づくりは、浦戸湾口から城下町にかけての物資を運送する海運体制ができあがったことを意味する。船舶の往来を円滑にするため、湾口の種崎地区の沿岸に、家老野中兼山の指揮のもと「兼山波止」という防波堤を設けている。

湾口にある龍頭岬には、大型船が夜間航海するために必要な燈明台（常夜灯）が設置された。これが設置されたのは、万治年間（1658～60）のことである。板葺の家屋で、油と灯心で光明を放つ大灯籠が用意されていた。近くにある旧浦戸城の天守台跡には、船頭たちによって天気観測がおこなわれる日和山も設けられた。対岸の種崎浦にも日和山があった。

幕末になると、海防問題がやかましくなり、十五代藩主山内容堂（豊信）は安政 2 年（1855）に西洋式模型蒸気船の製造を命じて湾内で試運転をおこなっている。文久 2 年（1862）には、土佐藩の海軍修練方の製作した『浦戸湾実測図』（高知県立図書館所蔵）がある。地図は縦 2.8m、横 1.28m。縮尺約 2500 分の 1 の大きなものである。桂浜の浦戸湾口から北部の潮江地区までの南北 7km、東西 2km の沿岸部を描写している。種崎地区には「御船奉行」、「御船倉」が書き込まれている。この図の製作された翌年の文久 3 年にイギリス商人ウイルオンソンから蒸気船（412 トン）を購入したり、大幅な海軍行政組織の改革が実施されている。従来和船時代から西洋式蒸気船時代へと移行する胎動期に、精度の高い浦戸湾図が製作されたのである。

一方では、開国の動きにともない、山内容堂によって登用された吉田東洋は、安政 5 年（1858）に強力な藩政改革に乗り出した。紙、椎茸、樟脳などの国産品の統制強化を行い、

長崎貿易を考えて、岩崎弥太郎らを長崎に派遣している。その遺策を継承した後藤象二郎は、慶応2年（1866）に、湾内の北部にある九反田に開成館を建設して軍艦局を設け、洋式蒸気船の機関学や航海学、海軍砲術などの教育をおこなっている。慶応2年から翌年にかけて購入した蒸気船は、「空蟬」、「胡蝶」、「夕顔」、「羽衣」、「若菜」である。帆船は、「乙女」、「横留」となっている。

この期間の年間経費四十二万六千八百五十一両であったが、その内軍艦や商船の購入費三十一万七千九百両余、銃砲弾薬費四万三千二百二十二両余とあるように軍艦や武器の購入が主たる目的であった。なお、開成館内には、勸業局、捕鯨局、訳局、医局などあわせて12局の大がかりな組織になっていた。

漂流者ジョン万次郎（中浜万次郎）は、開成館で英語、航海術、測量術、西洋式捕鯨術などを教えている。慶応2年8月には、後藤象二郎に随伴して上海にまで行き、蒸気船購入について外国人と交渉している。開成館の動きは、幕末に海洋への発展を夢見た証しの建物だったといえる。このような経済力の支えがあったからこそ、土佐藩は蒸気船などの調達を可能にし、政治的には大政奉還を推し進める大きな貢献ができたともいえるであろう。

5. 浦戸港から近代の高知港へ

明治維新後の新動向を受けて、明治3年（1870）に開成館は、外来客を接待するだけの賓館に改めた。商業機能を有していた土佐商會を解散し、土佐開成商社を構想したが、すぐに九十九商會と改称した。社長に就任した岩崎弥太郎は土佐屋善兵衛を名乗り、藩船を借用して浦戸から阪神や東京方面の海運業に乗り出した。明治5年には三川商會と改称、さらに三菱商會となっている。

したがって明治初年は、浦戸から阪神方面を結ぶ土佐航路を岩崎弥太郎の三菱商會が独占しており、当初は週一回の運行であったが、同15年頃から回数が増加されている。同20年には高知汽船会社の高知丸が周航するようになると、隔日の運行となった。同25年に土佐郵船会社ができてからは、ほぼ毎日航海するようになった。明治32年には、土佐商船会社が創設され、県内の東西沿岸航路も延長されたが、同40年に大阪商船会社が阪神航路を独占し、同44年に高知に支店を設け、1,300トン級の2隻を就航させた。

当初は「ハシケ」という小舟で、湾内に停着している船まで人や荷物を農人町から運んでいたが、明治30年ごろに潮江地区に土地を埋め立てて広い岸壁を造り、船を着岸させ乗り降りに鉄で造った小さな「浮き棧橋」を利用するようになった。併せて、市民の憩いの場としてのさんばし公園も造成している。

昭和初期になると、高知市の発展にともない、工業物資などの移出入貨物も年を追って多くなり、集散地として繁栄するようになって、国の手で大型船を横づけできる新しい岸壁が造られた。このころの大阪～高知間の運賃は一等で10円80銭、二等で7円20銭、三等で3円60銭であった。高知を午後4時に出発して、大阪には翌日の午前7時30分に到着した。昭和2年に浦戸湾が重要港湾に指定され、港の本格的な改修工事が始まり、同18年に3,000トン級の船の出入りが可能になった。なお、昭和13年に浦戸港を高知港と改称している。

平成10年3月に太平洋新時代に向けて、待望の高知新港の一部である3万トン岸壁と

13,000 トン岸壁の供用も開始された。その後も着々と港開発が進行しており、国際中継港としての高知新港の役割が注目されている。

そして、瀬戸内海、本州を結ぶ四国横断自動車道や高知空港と一直線で接続する高知東部自動車道などの道路体系の整備も進められている。かつての陸の孤島状態から西日本の物産ターミナル港へと新しい役割を果そうと活躍している。

平成 15 年度の統計によると、新港から輸出されるものは、金属くずが約 28,000 トン、紙・パルプが約 5,000 トン、化学薬品が約 40,000 トン、再生利用資源が約 1,600 トン、石灰石が約 10,500 トンなどとなっている。輸入されるものは、石炭が約 90,000 トン、鉄鋼が約 25,000 トン、農産物が約 10,000 トン、リン鉱石が約 8,800 トン、紙・パルプが約 7,000 トンなどであるという。

国内的には、関東・東海方面、中部方面や関西方面などへ石灰石・非金属鉱物・セメント・園芸品などを移出しており、石油製品・砂利・砂・非金属鉱物などを移入している。

なお、高知港の姉妹港、友好港として、インドネシアのタンジュン・プルバス港、スリランカのコロombo港、フィリピンのスービック湾港、中国の青島港があり、国際的な貿易の実績をあげながら友好の輪を広げている。

第2章 「みなと文化」の要素別概要

1. 海運安全のための祈願寺社

（1）土佐神社のつぶて石と船遊び行事

高知市一宮は、古代から浦戸湾の北岸にあって、土佐国の総鎮守である一の宮、すなわち土佐神社が鎮座していたことにより、その地名が名付けられた。『日本書紀』に土左大神、『風土記』に土佐高賀茂大社、『延喜式』に都佐坐神社となっている。

この神社の東側に高さ 1.8m、周囲約 5m の「つぶて石」という大岩がある。この大岩は、遠く離れた須崎市浦内湾の最も奥深い場所の鳴無神社に鎮座していたもので、大昔の神の意志により土佐神社に飛ばされてきたとの不思議な伝承がある。その辺りは古代海洋民が集住していた海部郷という古代村落があった所で、昔は8月の土佐神社の祭礼では、神の御神幸がここまでやって来て、ともに「御船遊び」の行事を華やかに行っていた。この伝承は古代海洋民の発展過程を物語る海洋伝承の一つであろう。土佐神社には御船遊びを物語る絵巻が保存されている。また、富士山と藩船を描写した大きな絵馬が神殿に二枚掲示されている。延享年間（1744～47）頃、湾内の種崎浦にソギ乗りという漕術の名人であるソギ十右衛門が奉納したものである。高知市五台山ふもとには、「小一宮さま」を祀る神社があり、昔は、土佐神社の御神幸の時に船で渡御されていたといわれている。

（2）掛川神社の海の神さま

土佐神社のある一宮地区に隣接した掛川地区には、江戸時代初期に二代藩主山内忠義が、高知城の鬼門鎮護のために旧領遠州掛川から天王宮を勧請して掛川神社を建立した。のちに、徳川家康の霊屋を設け祀った東照神社も合祭している。したがって、藩内で唯一の葵紋の使用をみとめられた神社である。それに、山内家から奉納された二つの太刀が重要文化財に指定されている。この神社の境内の一つに海の神を祀る海津見神社があり、漁業関係の絵馬が数多く奉納されている。この神社については『一宮未来を翔る』という冊子に次のような伝承が紹介されている。

「二代藩主忠義公が参勤交代のおり、浦戸から船出を致しました。ところが室戸の沖で台風のため、危うく遭難をまぬがれ引き返し、天王宮で一夜過ごされましたが翌日すぐ出立されました。その時、忠義公は海津見神社の御神体を預かり船に奉って、まだおさまらぬ海上を無事旅ができた」

これまた、近くの山間部にある三谷寺にも『類従土佐故事』などによると、三代藩主山内忠豊が船で帰国の折、浦戸沖で海難防除の祈願したことにより、海難をまぬがれたとある。歴代藩主からも篤く信仰されていたという。

（3）仁井田神社の夕顔丸の絵馬

江戸時代に湾内の種崎方面は、土佐藩の造船所などがあり、海運の根拠地の一つであった。その地区内にある総鎮守の神を祀る仁井田神社には、船頭や水主たちが篤く信仰し、よく参拝に訪れていた。昭和 56 年末にこの神社の拝殿で、幕末の大きな歴史を物語る藩船夕顔丸の絵馬が発見されて話題になった。大きさは、縦 89cm、横 1m12cm で右側に「夕顔艦運用方」と墨書されている。黒と黄の船体、三本マストに張られた帆、一番高いマス

トに掲げられた日の丸の旗などが描写されており、煙をはきながら航行している船姿である。上部に「奉掛 所願成就」と書かれており、海上での航海安全を祈願して、藩船の運用所が船の勇姿を描き、神社に奉納したものであろう。夕顔丸の原名はシュリン・鉄船で、659トン、イギリス商人オールトから慶応3年に15万5千ドルで土佐藩が購入した洋式船のなかでも大型なものである。慶応3年6月9日、海援隊長坂本龍馬と家老後藤象二郎は、共にこの船に乗り込み、長崎から兵庫までの船旅をしている。その折、その船中で二人は近代日本のあるべき姿を求め、その政治綱領である「船中八策」をまとめあげたことは、あまりにも有名である。それに、同年7月の長崎でのイギリス水夫殺害容疑事件でも、後藤象二郎とイギリス公使パークスとの談判の場にも利用されている。この絵馬は、市立自由民権記念館に収蔵されている。模型は国の重要文化財・山内家武家下長屋と、高知歴史民俗資料館で、それぞれ展示されている。神社の拝殿には、「地曳網漁」、「海難図」など数多くの絵馬も奉納されている。

（4）浦戸の山祇神社と日和山

浦戸湾の入り口にあって、湾内を一望できる浦戸城跡の詰の段（本丸）に、城八幡と山祇神社がある。ここが江戸時代に日和山があった場所で、早朝に大型船の船頭が、ふもとからこの場所にやって来て、船の運行の安全を祈願するとともに天気予報をしていたという。この風習は大正年代頃まで続き、雨か晴かの予報を赤、黒、白の布を張った円球、円筒形の提灯を用意しておいて、合図をふもとの漁村に知らせていたといわれる。湾口が狭く、遭難もあったので、日和見の仕事は、極めて大切な仕事であった。天気予報の的中率で5割の確率、すなわち月のうち15日もあたれば日和見巧者といわれていたという。



【日和山】

日和見は朝早く海岸近くの日和山に登り、天気の前兆である雲がどんな状態にあるのか、風の方向や強弱、或は空気の湿り具合などから天気の予見をするという大変な仕事であった。また、日和見をする人びとが集まり、その的中率の正確さを競うために「日和入札」という制度もあった。彼らは航海経験ゆたかな船頭や水主のなかから選出されていた。なかでも、田島治左衛門という人は7割以上の的中率を示し、藩庁からよく褒められるという栄誉に浴している。なお、治左衛門は天文学者としても優れていたと推察されている。

2. 浦戸港に来た人びと

（1）夢窓疎石と吸江十景

日本を代表する高僧の夢窓疎石は、文保2年（1318）に、鎌倉幕府執権北条高時の母覚海の招待をさけて土佐に来国し、五台山の西ふもとに草庵を設けて住みつき、この草庵を吸江庵と称した。疎石は、草庵の眼前に広がる浦戸湾の風景を中国の西江に見立てて吸江と名付けている。その湾内の風景のなかで「見国嶺」、「独鈷水」、「粹適庵」、「磨甌堂」、「潮香洞」、「雨華巖」、「白鷺州」、「玄夫島」、「泊船岸」、「呑海亭」という十箇所をえらんで「吸

江十景」と名付けている。そして、「心あらん人に見せばや吸江の岸のむかひのゆふべあけぼの」という歌を詠じている。疎石が吸江の風景を大いに好んでいたことが理解できる。

疎石は2年余りで吸江庵を離れたが、これまた日本的な高僧である義堂周信、絶海中津らが継ぎ、海南の名刹として天下に鳴り響き、室町幕府の手厚い保護のもとでその地位が高められている。堂内には、足利尊氏の守り本尊と伝えられる「勝軍地藏」（国の重要文化財）が安置されている。さらに、疎石自筆の「西来堂」、室町幕府四代将軍・足利義政書の「吸江庵」、絶海書の「磨甄」などの扁額が掲示されている。吸江寺文書二巻も保存されている。さらに、戦国時代には長宗我部氏の手厚い保護をうけており、慶長6年（1601）に山内一豊が入国したのにもとない、義子の湘南和尚によって中興されて吸江寺と改められた。

なお、伊達騒動で有名な伊達兵部や幡随院長兵衛と張り合った旗本の加賀爪甲斐らの墓は寺山にあり、位牌は寺内に置かれている。

（2）イギリス人・アーネストサトーの来航

慶応3年（1867）7月に、長崎でイギリス人水夫殺人事件があった。その犯行の嫌疑が土佐海援隊士にかかった。土佐藩に抗議するために、イギリス公使・パークスが8月6日に高知県西部にある須崎港に入港した。後藤象二郎は、パークスの一方的な脅しにも屈することなく再調査の約束をとりつけている。この国際的事件におけるイギリス側の通訳官がアーネスト

サトーであった。8月11日に一行から離れて須崎港から浦戸へやって来て、九反田の開成館で山内容堂と会談している。浦戸湾に入った時の印象を、「はるかかなたに小山がつづいている。海岸沿いに生えている帯のような松並木の景色は、私にセイロン島のポアン・ド・ガル湾をまざまざと思いおこさせた」（『一外交官の見た明治維新』岩波文庫）と回想録のなかで、風光明媚なセイロン島にある光景を思い描いている。サトーは翌日須崎港に戻り、土佐藩船の夕顔丸に乗船して長崎へ帰港して行った。

なお、水夫殺人事件は、全くのぬれぎぬであったことが後日判明した。明治4年になってパークスは山内容堂宛に、土佐藩に非常に迷惑をかけた旨の挨拶状を送付している。

（3）西郷隆盛・大久保利通・木戸孝允の来航

幕末に殖産興業などの目的でつくられた開成館は、明治3年に「寅賓館」と名称が改められた。明治2年の版籍奉還などの動きに見られるように、明治新政府は中央に権力を集中させるため、勅使・岩倉具視を薩摩や長州に派遣した。その動きのなかで勅使に同行していた薩摩の西郷隆盛と大久保利通、長州の木戸孝允が明治4年正月16日、長州の雲揚艦で三田尻港を出帆し、17日に浦戸に入港した。会談は、土佐側の大参事・板垣退助、権大参事・福岡孝弟らを交えて行われ、土佐側は明治政府への親兵派遣を承諾している。翌日に藩知事の正式の許可を受けて、西郷らは21日に高知を離れている。この動きは、同年7月14日に発布された廃藩置県令へと加速されるものである。

このような日本の近代化の流れのなかで、大きな舞台がこの場所であったといえる。高知市九反田公園内に、「開成館跡 西郷木戸板垣三傑会合之地」と、刻記された記念碑がある。

3. 土佐の民謡・よさこい節

江戸時代中期になると、土佐の産物（カツオブシ、クジラ肉、和紙など）が上方市場に盛んに移出するようになった。参勤交代や伊勢参りなどで、数多くの土佐人が他国へ往来するようになると、文化の交流も活発化していった。そして、土佐の代表的な民謡も誕生する。「土佐の名物珊瑚に鯨、紙に生糸に松魚節 ヨサコイ ヨサコイ」、「いうたちいかんちやおらんくの池にや潮ふく魚が泳ぎよる」、「わしのトイチ（情人）は、浦戸の沖で、雨にしょんぼりぬれて鰹つる」などという歌が、宴会の場を盛り上げるために盛んに唄われるようになる。

幕末に、僧侶の純信とお馬の駆け落ち事件を「土佐の高知のはりまや橋で坊さんかんざし買うを見た」と唄われ、有名になり、全国的にも知られるようになった。

このよさこい節の起源については、諸説ある。細木秀雄氏は〈宝永年間（1704～11）の近松門左衛門作『五十年忌歌念仏』や『心中重井筒』にお夏清十郎をうたった（略）歌詞の初句に「夜さ来い」という文句は当時すでに普遍化していたようである〉（『高知県百科事典』）と述べている。『日本国語大辞典』（小学館）の「よさこい」の条には、〈夜さり来いの変化した（略）歌舞伎・三人吉三廓初買～二幕「吸筒の酒にぶらぶらとよさこい唄ふ侍とは訳が違ふぞ」〉とあるあたりが、よさこい節の原形だと思われる。

他国との船の往来が盛んになった江戸時代中期に、よさこい節の曲調の原典が導入されたのであろう。そして、宴会をさらに盛り上げるために、生まれた土佐の独特の「箸拳遊び」もまた、薩摩の「なんこ遊び」を薩摩の船頭たちがおこなうのを見て、発展させたものである。

なお、よさこい節を基調としたお座敷のよさこい踊りが生まれる。やがて、昭和29年から高知市の夏の年中行事として「よさこい鳴子踊り」として発展していく。それがいまや北海道の「よさこいソーラン祭」など全国各地に普及して行く状態になっている。



【よさこい祭り】
((財)高知県観光コンベンション協会 HP)



【箸拳（宿毛はし拳友の会）】
（四国電力 HP）

第3章 「みなと文化」の保存と振興に関する地域の動き

1. 浦戸湾関係古絵図の保存

（1）吸江図絵

高知県立図書館蔵の江戸時代の「吸江図絵」は、江戸時代の画家・橋本小霞が浦戸湾の吸江を中心として描写したものである。大きさは、縦 54.9cm、横 73.6cm の軸装となっている。付録の説明書に、十境（白鷺州、玄夫島、独鈷水、沿船岸、見国嶺など）、遠景（桂浜、浦門、御豊瀬、種崎、仁井田、玉島など）、遥景（長浜、蹉跎岬）、補景（渡船、文殊参詣、游船、鈴舟、網舟、廻網、漁舟、鰹舟）、点景（人物二百二十四人）、船（帆船九十五艘）、社寺人家御船倉（百三十六軒）と、書いてある。浦戸湾の風景や人間の動きなどたくさん盛り込んで描写されていて、風俗画の趣もある。浦戸湾の全体を俯瞰的に工夫をこらしてまとめてあるので、江戸時代の浦戸湾の様子が一目でよく理解できる。

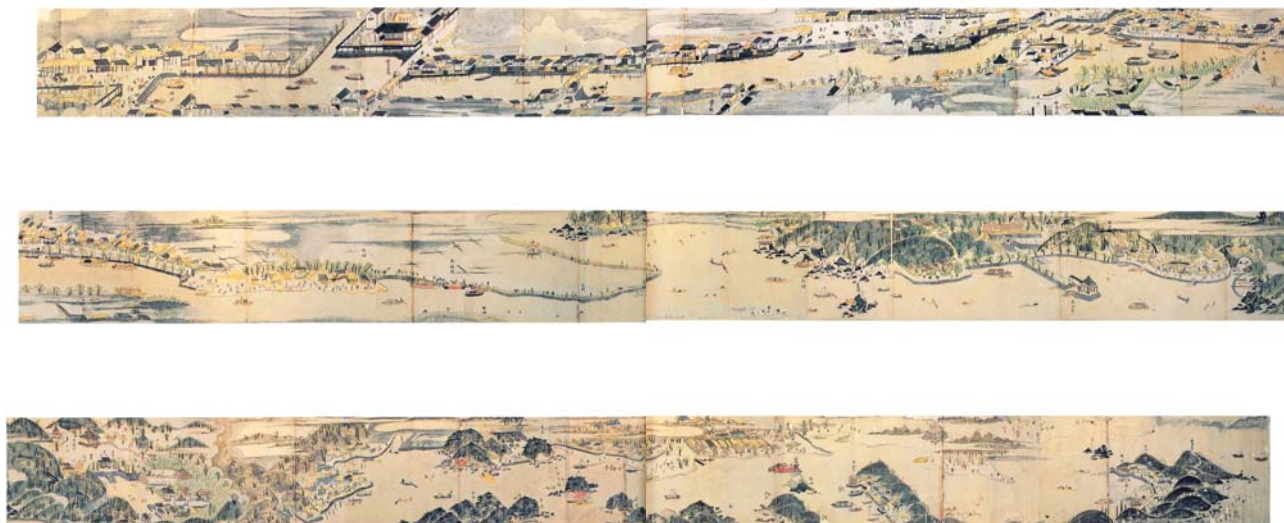
なお、吸江十景の図絵を冊子にまとめた木版本の『吸江図志』がある。原画は画家・河田小龍が描き、図上に詩人や俳人らの文人が讃を書き入れている。明治 11 年好二堂の刊行であるが、原画は文久 2 年（1862）頃完成されたといわれている。この冊子は、その後、開成舎などでも刊行されている。浦戸湾の吸江十景はこのように名勝地として好まれ、四季折々数多くの人びとが訪れていたようだ。五台山の日吉神社や護国神社には、明治 5 年に奉納された「吸江図」の絵馬がある。

（2）高知下町浦戸湾風俗絵巻

江戸時代後期に作成された『高知下町浦戸湾風俗絵巻』は、高知市立市民図書館と土佐山内家資料館に収蔵されている。大きさは縦 27cm、長さ 9m20cm の長尺ものである。

高知城下町の郭中の堀詰から、下町方面にある播磨屋橋、松ヶ鼻関所口を通過、五台山のふもとにある吸江、湾の中央部の玉島など。さらに、種崎、湾口の桂浜に至るまでのかなり長い絵巻になっている。城下町の商人街と商いする人々、松ヶ鼻関所口では数多くの荷物船の荷揚げ作業、吸江や孕海域辺りには、大型船が何艘もみとめられる。沿岸沿いを往来する庶民の姿まで描かれている。風俗画としても鑑賞に値する。なかでも注目されるのは、大型船の廻船、いさば船、網船、小さな漁船が何十艘も登場しているので、貴重な海事資料となっている。

この絵図は、平成 5 年に、高知県立歴史民俗資料館の「土佐古絵図展」で公開されて、図録にも収録されている。



【高知下町浦戸湾風俗絵巻】（高知市立市民図書館蔵）

なお、香美郡香南市土佐山田町藁原神社には、宮田洞雪の描いた「浦戸湾風景図」の絵馬が奉納されている。

（３）種崎浦の古絵図など

松野尾章行が明治時代に編集した『皆山集』（高知県立図書館蔵）をひもとくと、「宝永四年前種崎村ノ旧図」（第五十九巻）、「長岡郡種崎浦御舟倉等図」（第百九巻）、「種崎浦之図」などと種崎浦の古図を多く見かける。この浦方には舟奉行の官舎、造船所、乗組員の水主や船大工が集住していたことがよく解る。

また、高知県立図書館には、種崎浦船大工の秘伝書である「神霊祭文秘書」、「瀬戸流秘書」、「造船法許状」の六巻が収蔵されている。これは、享保 9 年（1724）に船大工棟梁岡四郎右衛門が弟子の早川市郎右衛門に伝えたものである。図面は添付されていないが、「川舟」の分だけは現在、神戸商船大学に所蔵されている。

2. 「みなと文化」の振興の動き

（１）浦戸大橋と桂浜公園

昭和 47 年に、浦戸湾口をまたいで、桂浜公園と種崎を結ぶアーチ型の浦戸大橋が完成した。二車線の道路で、総延長 1,480m、海面からの高さは最高 50m である。平成 14 年から通行料金が無料となった。高知龍馬空港も近くにあるので、観光ルートとして大きな役割を果たしている。

江戸時代に、灯明台のあった龍頭岬の巖頭には、幕末に海の王者たらんと海援隊を率いて活躍した大きな坂本龍馬像が立っている。台座約 8m、像の高さ 5.3m である。

また、平成 3 年には、長宗我部元親の居城であった浦戸城跡地に船を模したユニークな姿の坂本龍馬記念館が建設された。全国的な龍馬ブームで、各地から数多くの人々が訪れている。



【龍馬像】



【坂本龍馬記念館】

文人・大町桂月が「みよやみよみな月の桂浜 海の面より出づる月影」と映じたり、民謡よさこい節で「みませみせましょ浦戸をあけて月の名所は桂浜」と歌われているように、桂浜は月の名所でもある。中秋の名月の夜には、酒をこよなく愛した大町桂月を偲んで「桂月先生記念碑」の前に、県下の文化人が多数集まり、歌会や句会を催した後に酒宴をおこなっている。観光協会など主催の「御月見の夕べ」も開かれ、かがり火が焚かれたなかで、一弦琴や琴の演奏、日本舞踊などもあり、賑わう行事になっている。

浜辺には水族館もあるので、県下の学校の遠足地ともなっている。公園へ通じる西側の浜辺の道は「桂浜花海道」として、全長2,700mが整備され、道沿いに花壇を設け、四季折々の草花が植えられ、年中楽しめるようになっている。



【桂浜公園】

（２）種崎の千松公園と海水浴場

浦戸大橋の東側にある海岸は、高知県立種崎公園である。かつては国有の数千本の松林があった。後、明治42年、石原健三知事の時代に払い下げを受け、千松公園として久方の浜と命名した。江戸時代の元禄16年（1703）に、江戸の文人・斎藤唱水が来国し、「おもかげは三穂にやかよふ海原の波路につづくいその松原」と詠じて、この浜を賞賛している。

幕末の安政地震（1854）の折、地元の歌人杉本清員は、「流家倒家死人共なし（略）誠に此浦第一の浦園にして、後世一本も減ずべからざるもの也」と、松林が防波林として大きな役割を果たしたことを述べている。この松林の前面には遠浅の浜辺がひろがっていて、夏場は海水浴場として賑わう場所になっている。

高知新港の後背地は、ハウス園芸地帯になっている。寛政11年（1799）にキュウリ栽培が始まったとの記録がある。享和2年（1802）には、藩船の船頭甚内が紀州熊野浦からナスの種子を持ち帰り、栽培を始めたという。ここから、土佐園芸が始まり、その伝統が

受け継がれ、「園芸王国土佐」と言われるようになっている。最近では、花卉栽培も盛んにおこなわれ、外国でも高い評価を受ける品種を作り出している。

（３）五台山公園と展望センター

大昔、五台山は大島と呼ばれ、標高 139m の浦戸湾に浮かぶ島だったといわれる。明治 43 年、高知県知事杉山四五郎の時代に県立五台山公園となった。この地は、聖武天皇の勅命を受けた行基上人が中国の仏教聖地の五台山に似た山だとして命名し、竹林寺を建立している。山上には、「五台山展望サービスセンター」が設けられている。ここに立つと、浦戸湾、高知市街地、高知平野などが手に取るように、360 度の風景を眺めることができる。ことに、浦戸湾の歴史の面影を伝える島々が残されている。

昭和 33 年、公園内に、高知県出身の世界的な植物学者・牧野富太郎の功績をたたえて、牧野植物園が設けられた。平成 11 年に「牧野富太郎記念館」ももうけられた。広大な園内で約三千種の植物を楽しむことができる。四季折々県内外の多くの人々が訪れている。

竹林寺は弘仁 3 年（822）、空海（弘法大師）によって復興され、四国霊場三十一番札所となった。本堂前には、高さ約 2m の石灯籠がある。この石は、はるばると静岡県伊豆稲取から海路を通じて持ち込まれたもので、二代藩主山内忠義が、正保 2 年（1644）に奉納したものである。その他にも、大阪商人によって寄進された大石灯籠もある。海路安全祈願のため奉納したものであろう。

かつては、大師堂脇に三重塔があったが、明治 32 年の台風で倒壊してしまった。昭和 55 年に高さ 31.2m の五重塔が建立された。江戸時代の古図や絵馬には、かつての三重塔が朱色も鮮やかに描写されていて、この塔が浦戸湾のシンボリック的存在であったことがうかがえる。

（４）青柳橋と丸山親水公園

浦戸湾の北部、高知城下町への堀川入り口辺は、幕末の古図によると、玄夫島、弘化台、丸山などの岩礁がみられる。この辺りに川船の渡し場があり、五台山吸江村から対岸の城下の下知村にかけて人びとが往来していた。

明治 5 年、この場所に近代的土木工事による青柳橋が架けられた。この橋は、当初賃取り橋であり、一人三厘であった。大正 10 年に県道に編入されている。やがて、老朽化して架け替えられる。平成 4 年現在の橋となる。

弘化台あたりの開発も進み、市内九反田にあった高知中央卸売市場が狭くなったので、昭和 42 年 3 月ここに移転した。ここでは、魚類、塩干、青果物が集まり、年間約 500 億円の売り上げがあり、高知県民の台所として大きな役割を果たしている。弘化台から青柳橋経由の種崎へは、回り道で不便であった。弘化台から五台山南吸江への直線道路が計画され、昭和 42 年 10 月、長さ 362.8m、幅 16m の新青柳橋が完成した。この橋は、臨港工業地帯や国道 32 号、55



【丸山親水公園（手前は弘化台）】

号を結ぶ重要幹線道路の橋になっている。

他方、弘化台西側の鏡川河口にある丸山台は、高知県が進めていた公園整備は平成6年に終わり、4月に親水公園としてオープンした。丸山台は弘化台と南新田の河中のほぼ中間にあり、東西約6m、南北約15mの小島である。この島には、明治時代、此君亭という料亭があり、前期の自由民権運動が盛んな折、運動家の闘士たちがよく利用したといわれている。

明治16年には、ヨーロッパ視察を終えて帰高した板垣退助を囲んで党员や県民ら3,000人も集まったことが知られている。

歓迎船は百数十艘を数え、湾内の玉島から西孕の海上一帯は船で埋められたという。この地には、板垣退助の「帰朝歓迎碑」が建立されている。自由民権を求めて闘った数多くの闘士たちの熱い思いが熱烈に込められている。この島への架橋運動が起きたけれども実現されていない。

（5）開成館跡の公園整備の動き

幕末に設立された開成館は、土佐の近代的夜明けに大いに貢献した。しかし、最近まで東九反田公園にあるその跡地には、それを示す小さな石碑があるのみであった。開成門はかなり離れた場所にある高知県立小津高等学校に移転され、県の文化財に指定されている。その校内には、昭和15年と、昭和46年に建立された記念碑が二つある。

のちに、開成館跡地が公園化されたが、明治初年この地に「立志社」が設けられた由緒により、昭和17年、自由民権運動の発祥の地として板垣退助の功績を記念するために、対岸にあった板垣旧邸を移転させて憲政館と称した。記念館の西側に高さ10mを超える大きな「憲政之祖国」の碑と、北側に「嗚呼不朽」の碑を建てた。戦後になり、二代目の憲政館が老朽化したので取り壊された。



【現在の高知県立小津高等学校開成門】
（高知市教育委員会生涯学習課提供）

高知市教育委員会の手により、新たに史跡公園として整備をするために、平成16年から試掘調査が第三次まで実施され、地下の遺構の残存状況が確認された。その折、江戸時代の石垣や溝、若干の遺品が検出された。高知市文化財保護委員会にはかり、平成18年度事業として幅広い史料収集をおこない、開成館、寅賓館、その後の立志社、立志学舎、海南学校の歴史を明らかにするために『開成館跡調査報告書』のとりまとめをおこなった。

これらをふまえて、正式に高知市の史跡としての登録が決定された。公園内には、来園者のために、開成館の歴史を紹介した掲示板がいくつか作られた。公園沿いにある堀川は、かつては城下町へ往来した小船の道筋であったから、沿岸に桜の木が数多く植えられ、その名所となり市民に親しまれている。

3. むすび

二十一世紀は海洋の時代といわれている。高知県にはまだ、海洋史料館がない状態なので、海洋関係の資料を収集すると共に、「高知県海洋史」、「高知（浦戸）港史」などをまとめて、史料館の開設を願いたいものである。